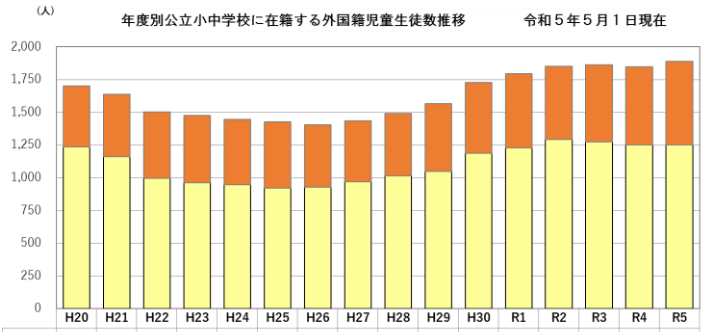
発表 No.実１１　　**実践発表**

初期日本語指導拠点校「江南教室」の役割
―学び方を知り、未来を見据える力を育む―

古橋　水無（浜松市教育委員会）

浜松市公立中学校に在籍する外国籍生徒数は、平成 30 年度に 540 人を超え、令和 5 年度には 636 人と過去最高になった。中学生年齢で来日した生徒は、数年で高校受験を迎える。中には、自分の居場所を見つけられず、自分がなぜ日本に来たのか納得できずに苦しんでいたり、日本語の学習が進まず、将来に希望がもてなかったりする生徒もいる。本来、これらの生徒たちにはこれまでのキャリアがあり、日本でも夢や希望を実現する可能性を秘めている。浜松市ではこうした中学生のために、短期間で学校に適応し集中的に日本語が学べるよう、令和 4 年 4 月、初期日本語指導拠点校「江南教室」を浜松市立江南中学校内に開設した。



	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
合計	1,700	1,638	1,503	1,476	1,447	1,426	1,405	1,435	1,493	1,565	1,727	1796	1,850	1,864	1,846	1,888
中学校	463	477	507	515	501	505	475	465	480	515	541	566	556	592	595	636
小学校	1,237	1,161	996	961	946	921	930	970	1,013	1,050	1,186	1,230	1,294	1,272	1,251	1,252

１．江南教室の概要

江南教室では、学校生活適応指導、日本語基礎指導、数学、英語、社会等、教科の基礎的な補習を 10 週間で行う。月曜日から木曜日は通級し、金曜日は在籍校へ登校することで緩やかに在籍校への適応を図る。これまで支援者派遣型の日本語基礎指導を１年間かけて 80 時間程度行ってきたが、集中的に江南教室で学ぶことで、在籍校での教科学習を早期に進めることができる。指導には、拠点校教員、外国人児童生徒教科指導員（以下教科指導員）、バイリンガルの就学サポーター（必要とする言語）、NPO から派遣される日本語・学習支援者で当っている。なお江南教室の開設に際し、豊橋市の初期支援コース「みらい」での実践や指導体制を参考にした。

２．江南教室の目標

江南教室では、１自分なりの学び方を知り生きる力をつけること、２交流を通して、視野を広げ将来を見据える力を育むことを目標に掲げている。

2.1.　目標１の達成に向けて

(1)　学習活動内容

１では、日本語や教科学習の学び方の素地を作るため、自分で新しい言葉を書き溜めていく「わたしの辞書」やタブレットを活用し、調べ、表現する活動を積極的に行っている。

(2)　指導・支援の工夫

浜松市では、日本語指導担当教師や教科指導員の研修で、ここ数年は「在籍学級で授業に参加できる力を育てる」をテーマに研修を積んでいる。拠点校や各学校での取り出し指導で学んだことを在籍学級で活かせてこそ、さらに多くの学びにつながると考えているからだ。これらを学び方を身に付けさせる場とし、在籍学級との足場架けを大切にしている。「わたしの辞書」は、言葉を紙に書き溜めていく。分からない言葉を書く、調べる、調べた言葉を何度も見る、読むことで、言葉の理解が深まるようにしている。いろいろな授業の場面で見返し、使える。

同様に数学の授業でも、ノートの取り方を指導するときに、ノートの右隅に大切な言葉を書くように指導している。また 1 人に１台貸与されたタブレットは、辞書機能や修了式での発表でスライド機能を使う等、活用の幅を広げ、いつでも使うことができるようにしている。

(3)　成果

学び方の一つとして「わたしの辞書」が定着すると共に、生徒は数学でも、大切な言葉の説明をノートに書くようになった。さらに小さいノートを持ち、それに積極的に言葉を集め始めた生徒もいる。このように在籍校でも引き続き活用している。またタブレットは、友達同士の交流のツールとして大活躍していて、友達への日本語での話し掛け方を学ぶ機会となった。そのため、様々な国籍の生徒が、片言の日本語とジェスチャーで助け合いながら授業に参加し、生徒同士の学び合いも自ずと活発になった。

2.2.　目標２の達成に向けて

(1)　学習活動内容

２では、自分を見つめ、視野を広げるために、①修了式でのスピーチ②オンライン交流③ロールモデルとの座談会を取り入れた。自国とは環境の異なる場で活動をしている生徒にとって、日本語での学習は目の前に高くそびえ立つ壁となり、気持ちが萎縮してしまうからだ。

(2)　指導・支援の工夫

①修了式のスピーチは、来日してからこれまでの自分を振り返ることで、今後の自分がどうなりたいか、新たにスタートをしていく上でとても大切な活動だ。スピーチの作成は、個人面談を何度か行い、話す素地を作ることから始め、７週目頃から作文を書き始められるようにする。母語で書いたものを就学サポーターの支援により翻訳し、日本語で書いていくようにした。

②オンライン交流では、日本人学校や市内の他校に編入した生徒と交流した。自分の学校の紹介や、お互いに聞きたいことを中心に日本語で交流できるよう、前もって内容や聞きたいことを就学サポーターと一緒に日本語にしておいた。

③では、将来を見据えられるよう、日本で自動車整備士の資格を取り、働いている外国籍の方を招き、話を聞いた。

(3)　成果

２では、修了式の発表のために自分史と将来について考え、自分の思いを日本語で表現することで、どの生徒も日本語の力が一段と伸びたと拠点校の担任は実感している。さらに日本人学校や他校の編入生徒とリモート交流したり、ロールモデルから体験を聞いたりすることで、自分と同じように外国でがんばっている仲間を知り、自分もそうなりたいという思いやがんばれば未来につながるという願いをもつきっかけとなった。

３．考察（実践で浮かび上がった課題と現状で抱える問題）

入級してくる生徒は、母国での学習状況に大きな違いがある。様々な問題から登校する機会を逃し、基礎学力がついていない者や学校生活に不慣れでコミュニケーションスキルが低い者もいる。また、中学生年齢で呼び寄せられたため、親子関係を一から築いていく難しさを抱えている者もいる。さらに江南教室までの距離が遠いため、バス代を確保できず、しばらく欠席する者もいる等、通学の課題もある。しかし、一つ一つの課題を乗り越えながら、江南教室は、生徒の揺らいでいた足元が固まり、新たな気持ちで、在籍校でがんばる足掛かりになっていると考える。

このように、初期日本語指導拠点校は、絆をつなげ、未来への駆け橋となっている。